

育児をとおして父らしくなる折り合いと自覚

森永裕美子* 難波峰子** 二宮一枝**

要旨 本研究は、育児期の父が、どのように“父らしく”なるのか、父自身の内面（意識）と行動から明らかにすることを目的に、3歳6か月児をもつ夫婦11組のうち父を対象に、父自身が“父らしくなったと感じたところ”についてインタビューした。

その結果、「母とのやり方の違い」、「仕事か育児か優先順位への迷い」、「父の家事・育児に対する考え」、「母に対してとる配慮」、「父自身で抑制」「父としての家族への責任」、「父としての子どもとの関わり」、「子どもの直接的反応への感情」、「子どもがいることで経験する慈しみ」の9つのサブカテゴリ、『父の中で葛藤する』『バランスをとる』『父として役割を遂行する』『父として実感する』の4つのカテゴリ、【父が折り合いをつける】と【父として自覚する】という2つの中心的概念が抽出された。そしてこれら2つの中心的概念は、父の内面（意識）と行動から父が父らしくなる一因であることの示唆を得た。

キーワード：父らしさ、折り合い、自覚、育児期

1. 緒言

近年の男性の育児参加への意識は広く浸透し¹⁾、「子どもとよく会話している」とする父が、ここ数年で急増し、「子どもと余暇や休日と一緒に楽しんでいる」等の回答も過去最高となっている^{2) 3)}。一方、母の行う育児の簡単な部分を父が手伝うことを、父親役割を發揮し「育児参加」をしていると感じている父も多く⁴⁾、父は「育児参加している」と感じているにもかかわらず、「父の育児参加に満足していない」母が4割弱であるとの報告もあり⁵⁾、父と母との認識のギャップが生じている⁶⁾ 実態もある。

父の育児参加は、良好な夫婦関係^{7) 8)} 母自身の発達⁹⁾ 母への精神的サポート^{7) 10) 11) 12)}、子どもの社会性・発達^{13) 14)} などに影響を及ぼすことが明らかとなっており、さらに、父に対して子どもへの愛着^{15) 16)} の必要性や育児参加のための具体的手段¹⁷⁾ も示されている。また妊娠・出産期から育児期に至るまでに父になることへの意識の変化¹⁷⁾ や父親役割の獲得^{18) 19)} が見られ、父自身が育児によって人間の成長を果たし^{8) 20) 21)}、父としての自覚をもち、子どもへの愛情が深まる¹⁶⁾ などの親性（親である

こと）が高まるといったプラス面のことがあるものの、仕事と育児のバランスへの葛藤²²⁾ や、父が感じる育児ストレス^{23) 24) 25)} などのネガティブな面も指摘もされている。

これらの先行研究の多くは、出産前後、乳児期における父を対象とした研究であり、育児期の父に焦点をあてた研究は少ない。加えて、ワークライフバランスや役割葛藤の観点からの研究²⁶⁾ であり、父がどのように“父らしく”なってきたのかを、父自身の内面（意識）と行動から明らかにしたものはみられない。

以上のことから、本研究では育児期の父が、育児をとおしてどのように“父らしく”なったのか、父自身の内面（意識）と行動から明らかにすることとした。

2. 研究方法

1) 調査対象者

K市の市民で、2008年7～8月に3歳健康診査（3歳6か月児）対象児をもち、3歳6か月時点でのアンケート調査協力が得られた父母のうち、面接によるインタビューへの同意が得られた11組のうち父

*岡山県立大学大学院保健福祉学研究科保健福祉科学専攻
**岡山県立大学大学院保健福祉学研究科

〒719-1197 岡山県総社市窪木111
〒719-1197 岡山県総社市窪木111

を対象とした。

2) 調査方法

インタビューガイドを作成し、主聴取者とサブ聴取者の2人1組が、調査対象者に聞き取りの内容確認を行いながら、“父らしくなったと感じたところ”についてインタビューを行い、データを収集した。対象者1人につき40分～50分のインタビューとし、追加インタビューは行わなかった。インタビュー内容は、調査対象者の了解を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。

3) 分析方法

帰納的アプローチによる質的記述的研究方法であり、質的帰納的に分析した。父自身が“父らしくなったと感じたところ”と関連する箇所を特定して具体例として抽出した。そして、抽出した各データを解釈しながら一般的コーディングを行い、どのように“父らしく”なってきたかというところの内面（意識）と行動に関するカテゴリ（概念）を作成した。作成したカテゴリ（概念）を用いて父が“父らしく”なっていることを構造化した。これらの分析過程において、抽出したデータ及びその概念化、構造化は、保健師資格を有し、地域看護領域における専門家（研究者）間で、繰り返し検討して分析の信頼性・妥当性の確保に努めた。

4) 倫理的配慮

調査対象者へは、本研究の目的・方法及び調査協力の辞退によって不利益が生じないこと、インタビュー内容は、データ化し、研究目的以外には使用

せず、研究者のみが厳重に管理すること、逐語録は個人が特定されないようIDで表記し、公表は匿名性確保すること、インタビュー協力以降でも、辞退が可能であることを書面と口頭で説明し、同意を得た後にインタビューを開始した。本研究は、岡山県立大学倫理委員会の承認を得た（平成20年7月31日付受付承認番号91）。

3. 結果

1) 調査対象者の概要

調査対象11名の平均年齢は36歳、子どもの数は2人が7名（63.6%）、3人が4名（36.4%）であった。職業は製造業が最も多く4名（36.4%）であった（表1）。

2) 内容分析結果

本研究の分析の結果、35の2次コード、9つのサブカテゴリが抽出でき、4つのカテゴリ及び2つの中心的概念が生成された。また、それらカテゴリ及び中心的概念の関係性を検討した上で、構造化した結果図を示した（図1）。本研究では、抽出した2次コードを< >、サブカテゴリを「 」、カテゴリを『 』、中心的概念を【 】で示した（表2）。

(1) 『父の中で葛藤する』

① 母とのやり方の違い

家事・育児においては、父がやろうとする手技は、必ずしも母と一致しないため、父は<母のやり

表1 調査対象者の概要

ID	父年齢	母年齢	子ども数	父職業	母の職業の有無
1	34	35	2	卸売・小売	無
2	33	32	2	製造業	有（パート）
3	37	26	2	製造業	有（パート）
4	37	36	3	卸売・小売	無
5	41	38	2	公務員	無
6	39	36	2	製造業	有（常勤）
7	37	37	2	サービス業	有（常勤）
8	34	35	3	情報通信業	有（常勤）
9	31	30	2	建設業	無
10	40	40	3	製造業	無
11	33	33	3	サービス業	有（常勤）

方を尊重する>ことでうまく物事が進むと捉えていた。一方で<母と違うやり方だが家事もする>が、<母のやり方を尊重>するあまり、手が出せず、育児・家事の主を母に渡している面もあり、<自由なやり方ならもっと家事・育児に力を発揮できる>と感じていた。

② 仕事か育児か優先順位への迷い

子どもができてから、<子どもが優先と切り替える>ことや、<家族を優先に考える>という家族内役割の認識はあるものの、<できる時は母を手伝うが、仕事を優先する>とも考えており、「仕事か育児か優先順位への迷い」を感じている。

(2) 『バランスをとる』

① 父の家事・育児に対する考え

父は、<自分ができる範囲でやる>という認識をもち、<できることはするが、できないことは手をださない>という割り切る面もあった。<主は母にとって欲しいが育児は手伝う>という本音の中、<一緒に育児をする感覚をもつ>ように意識し、<家事は平等でいい>と考えていた。また、<母から言われたことは逆らわずやる>と、母に依存的な面を持つ一方、<母が（子どもに）厳しいとき、父は柔

らかく>という父独自の考えを持つなど、「父の家事・育児に対する考え」についてバランスをとりながら進めていた。

② 母に対してとる配慮

父は、<母の大変さの訴えを受け止める>ことや<母の大変さの思いを測る、くみ取る>ことを自分のできる範囲で行い、<母の育児ストレスの高い状態を客観的にみる>ようにしていた。父は母の大変さについては理解したほうがいいという認識があるため、母の話を<面倒と感じながらも8割程度で聞く>という行動で夫婦間のバランスをとろうとする一面もあった。そのために<父母がそれぞれ思う普通が違うということにも歩み寄る>こと、<母とのコミュニケーションの必要性>を重視しつつ大きなトラブルなく育児期が過ごせるよう、父は「母に対してとる配慮」でバランスをとっていた。

③ 父自身で抑制

子どもができる前までは<自分の遊びだけを考えていた>時代から、子どもや家族の優先順位を高くし、独身時代のように一人で<遊びに行かない>といった行動を取り、自分のことだけ考えず家族のことを考えられるよう「父自身で抑制」できるようになっていた。

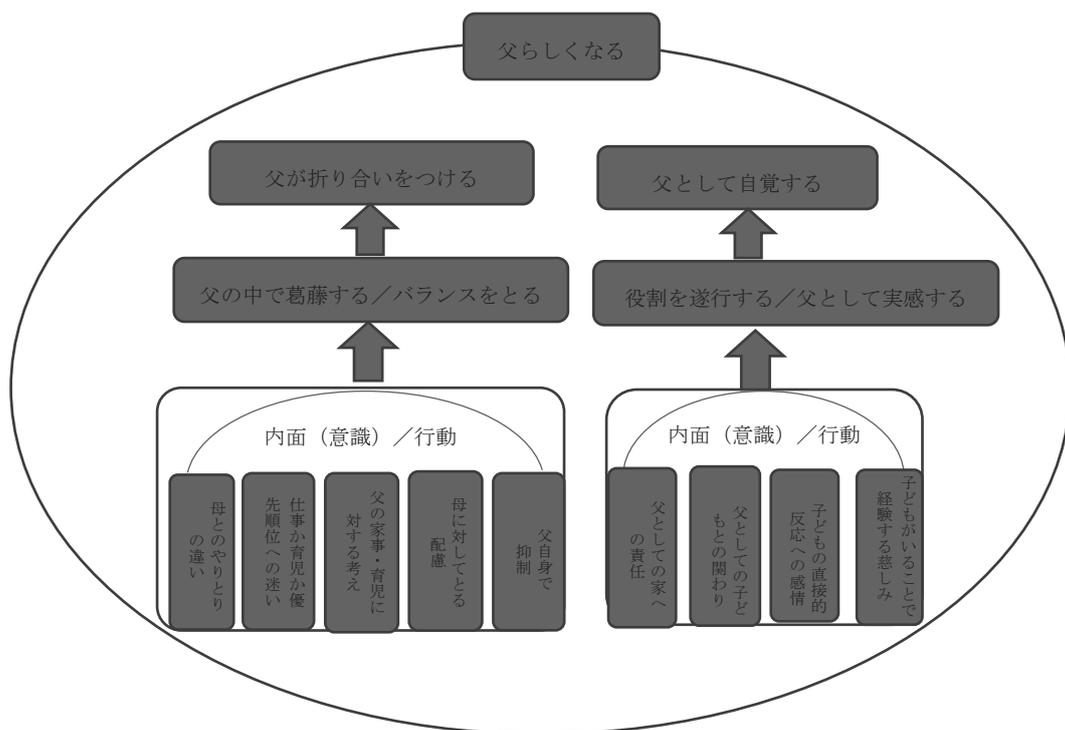


図1 父らしくなる折り返いと自覚

表2 内容分析結果

2次コード	サブカテゴリ	カテゴリ	中心的概念	
<母のやり方を尊重する>	「母とのやり方の違い」	『父の中で葛藤する』	【父が折り合いをつける】	
<母と違うやり方だが家事もする>				
<育児家事を父の自由なやり方ならもっと発揮できる>				
<子どもが優先と切り替える>	「仕事か育児か優先順位への迷い」			
<家族を優先に考える>				
<できる時は手伝うが、仕事を優先する>				
<自分ができる範囲でやる>	「父の家事・育児に対する考え」	『バランスをとる』		
<できることはするができないことは手を出さない>				
<主は母にとって欲しいが育児は手伝う>				
<一緒に育児をする感覚を持つ>				
<家事は平等でいいと思う>				
<母から言われたことを逆らわずやる>				
<母が厳しいときは、父は柔らかく接する>				
<母の大変さの訴えを受けとめる>				
<母の大変さの思いを測る、くみ取る>				
<母の育児ストレスの高い状況を客観的にみる>				
<面倒と感じながらも8割程度で聞く>	「母に対してとる配慮」			
<コミュニケーションの必要性を感じる>				
<お互いに思う普通が違うので歩み寄る>				
<遊びに行かなくなった>		「父自身で抑制」		
<今までは自分の遊びだけを考えていた>				
<家族が増え、仲間意識をもつ>		「父としての家族への責任」	『父として役割を遂行する』	
<家族のリーダー、まとめ役、方向づけをする>				
<父として求められた時、役割が果たせる>	「父としての子どもとの関わり」			
<父として子どもを叱る>				
<父にしかできない遊びや関わりをもつ>				
<子どもを目の前にする>	「子どもの直接的反応への感情」	『父として実感する』		【父として自覚する】
<子どもの世話をしないといけないと感じる>				
<子どもから頼られていると感じる>				
<子どもと接することでの満足感がある>				
<母との差別化や役割期待を子どもから受ける>				
<子どもが成長し、いろいろできるようになる、反応があって実感する>				
<親だからこそわかるタイミング、インスピレーションがある>			「子どもがいることで経験する慈しみ」	
<子どもや母からパパと呼ばれて実感する>				
<子どもの先々への心配をする>				

(3) 『父として役割を遂行する』

① 父としての家族への責任

父は<家族が増え仲間意識を持つ>中で、<家族のリーダー・まとめ役、方向づけをする>など、家族という一つの集団に属する自分を意識し、その中で、「父としての家族への責任」を父自身の果たすべき役割であると認識していた。

② 父としての子どもとの関わり

父は、<父にしかできない遊びや関わりをもつ>こと、<父として子どもを叱る>といった子どもの成長することで生じる「父としての子どもとの関わり」について認知していた。

(4) 『父として実感する』

① 子どもの直接的反応への感情

父は、<子どもを目の前にする>ので、<子どもの世話をしなければならぬと感じる>。育児の過程で<子どもが成長し、いろいろできるようになる、反応があって実感する>体験で多くの「子どもの直接的反応への感情」があった。

② 子どもがいることで経験する慈しみ

父は、<子どもや母からパパと呼ばれて実感する>ことや<子どもの先々への心配をする>といった「子どもがいることで経験する慈しみ」を抱いていた。

4. 考察

本研究の目的は、育児期の父自身の内面（意識）と行動からみて、“父らしく”なったのかを明らかにすることであった。

対象者は、3歳6か月時点の子どもの数も2人～3人であり、母の仕事の有無に偏りなく、一般的な対象と言えた。

本研究の結果からは、「母とのやり方の違い」、「仕事か育児か優先順位への迷い」、「父の家事・育児に対する考え」、「母に対してとる配慮」「父自身で抑制」「父としての家族への責任」「父としての子どもへの関わり」「子どもの直接的反応への感情」「子どもがいることで経験する慈しみ」の9つのサブカテゴリ、『父の中で葛藤する』『バランスをとる』『父として役割を遂行する』『父として実感する』4つのカテゴリ、『父が折り合いをつける』『父として自覚する』の2つの中心的概念が抽出された。

及川は、親性の獲得過程における変化として、「自己の内面の変化（心理面）」「自分の内面の変化（成長）」「生活面の変化」「役割意識」「パートナーとの関係」「家族のつながり」「社会」という7つのカテゴリを抽出している²⁷⁾。「自己の内面の変化（心理面）」「自分の内面の変化（成長）」「役割意識」「パートナーとの関係」「家族のつながり」については、本研究においても、2次コード及びサブカテゴリにおいて同様の結果が得られている。及川が示した仕事への意欲や自分の健康、経済面のことをあわせて「生活面の変化」と示したカテゴリと、友人が増えて違う社会との接点が増えたりするネットワークや子どものために良い社会を築きたいなどから得た「社会」で示したカテゴリは、本研究では「仕事か育児か優先順位への迷い」や「父自身で抑制」することが「生活面の変化」を、「子どもがいることで経験する慈しみ」が「社会」のより具体的な内容を示したものと考えられた。

以下では抽出された中心的概念の【父が折り合いをつける】と【父として自覚する】が、父らしくなることにどのように関連するのかについて検討する。

1) 父がつけている折り合い

伝統的に男性に与えられた役割が就労などの家庭外の役割であったため、家庭内の役割を積極的に果たすためには、意識改革が必要だと指摘されていたが⁷⁾、最近の父は、子どもが生まれてからの生活において、家事にしても、育児にしても自ら手を出すことについては躊躇をしていない。しかしながら、その手の出し方は、「母とのやり方の違い」を認識していることにより、葛藤を生じていることが推察できる。

また父が育児参加するにあたって、従来から仕事と育児のバランスについては指摘されており^{19) 28)}、本研究においても、「仕事か育児か優先順位への迷い」があった。このように『父の中で葛藤する』際には、父自身と母と子どもの3者の状況から判断して最終的にどれかを選ぶ、あるいは決定するために納得が得られるところを見つけて折り合いをつけていると考えられた。

父に着目した先行研究では、父がどのような家事・育児行動を行っているのか¹⁵⁾、父の育児が子ども・母・夫婦関係にどう影響するかといった内容¹⁰⁾と、“葛藤”として示されたのは、仕事と家庭あ

るいは育児、つまり仕事役割か家庭役割かという内容である^{19) 22) 26)}。育児期に良好な夫婦関係のもと、家事・育児など日常生活を送っていくために必要であり、かつ出産後から子どもの成長、父自身の経験と成長を併せて“父らしく”なっていくためには、“葛藤”しているだけでは進めない。父の内面（意識）や行動において大なり小なり折り合いをつけられるからこそ進むことができると考えられ、今回は具体的な内容が得られたと言えよう。

また、子どもがいることや家族が増えたことで、<今までは自分の遊びだけを考えていた>父が<遊びに行かなくなった>という行動をとっている。これらは一見マイナス面と捉えられるが、父の自由の制限や喪失感、親になることによる発達の一つの側面であるとされている^{28) 29)}ことから、遊びを制限することは「父自身で抑制」できるように父が人間的かつ父として成長し、行動の『バランスをとる』ことができていと考察された。

2) 父として自覚すること

先行研究では、父になることに対する気持ちや意識の変化として、立ち合い出産経験のあることや、切迫早産や早産児出生などで必然的にかかわらざるを得ない状況が、父としての意識に影響を及ぼし、父としての自覚が促される契機となっているとされている^{30) 31) 32)}。しかし、この場合は、危機的状況を乗り越えての子どもとの対面であり、“身の引き締まる思い”に近い、漠然とした自覚であると推察される。本研究で明らかになっている自覚は、子どもの出生に関して大きなインパクトがなくても、その後の育児期において、「父としての家族への責任」や「父としての子どもとの関わり」、「子どもの直接的反応への感情」や「子どもがいることで経験する慈しみ」など、父の内面（意識）と行動として具体的な内容で示されたと考える。子どもがいる毎日の生活の中で、子どもの成長を通じて『父として役割を遂行する』ことや、『父として実感する』ことで、【父として自覚する】ことができると考える。

3) 父らしくなる折り合いと自覚

父は、子どもが生まれてから3歳6か月になるまでに、子どもの成長と共に、子どもの反応があることや、子どもと母を通じて家事・育児などの多くの経験をしている。子ども・母、父自身の3者が置か

れた状況の中で父自身の行動として、父が役割を担うことに適応してきているとも考えられる。そのように適応するために父自身の内面（意識）を臨機応変に【父が折り合いをつける】ことができるということは、父自身も成長し、父らしくなってきている¹⁷⁾と推察された。一方で『父として役割を遂行する』ことや、『父として実感する』ことの経験が日々積み重なることによって、他の誰でもない、家族の中で自分が父であることを【父として自覚する】ようになると考えた。

5. 結論

父は、子どもが生まれてから日々「母とのやり方の違い」を感じ、「仕事か育児か優先順位への迷い」を生じるなど、『父の中で葛藤する』。父には、家事・育児に関する内面（意識）と行動において「父の家事・育児に対する考え」や「母に対して取れる配慮」と併せて「父自身が抑制」する行動をとるなど、日常的に『バランスをとる』ようにしている。こうした、『父の中で葛藤する』ことや『バランスをとる』ことで、【父が折り合いをつける】ことがわかった。

また育児・家事の中で「父としての家族への責任」や「父としての子どもとの関わり」を見出し、『父として役割を遂行する』ことができるよう行動していた。さらに「子どもの直接的反応への感情」や「子どもがいることで経験する慈しみ」を抱き、『父として実感する』。そして『父として役割を遂行する』ことや『父として実感する』父の内面（意識）と行動によって、【父として自覚する】ようになっていた。

以上のことから、父は、『父の中で葛藤する』ことや『バランスをとる』ことで【父が折り合いをつける】ようになり、『父として役割を遂行する』ことや、『父として実感する』ことによって【父として自覚する】。この【父が折り合いをつける】ことと【父として自覚する】ことで“父らしくなったと感じていた”と考えられた。

6. 看護への示唆

父自身は、育児参加をしようという積極的な意欲をもちつつも、自分が何をどこまでしていいかわからないままスタートしている。2010年にイクメンプロジェクトも発足し、自治体における父子手帳も

普及しつつあるが³³⁾、従来のパパママセミナーなどは、妊娠期・出産直後の育児手技（沐浴・おむつ交換等）を主として学ぶ場となっており、育児期に父がどのように子どもや母に接するのか、育児することで、父自身にどのような変化が起こるのか、またどのような考えのシフトが必要なのかを学ぶ場がとて少ない。

父親教室、父親プログラムなどのキーワードは聞かれているものの、実際父の多くはこういった教室やプログラムを受講した経験は乏しい。

したがって、本研究の示唆により、父は育児期において、葛藤することもある、バランスをとることも必要である、どこかで大なり小なり【父が折り合いをつける】のだということを理解し、父としての役割を担い、子どもの反応から実感を得ることで、父自身で父らしいなと【父として自覚する】よう意識し、また父らしくなることを目指す必要のあることについて学ぶ場・機会を設定することが必要であろう。

7. 付記

本研究のために、貴重な時間を割いて調査にご協力いただいたご家族の皆様にご心より感謝申し上げます。

8. 文献

- 1) 父親の育児参加に関する世論調査. 中央調査報 NO659. 一般財団法人中央調査社.
<http://www.crs.or.jp/backno/No659/6592.htm>
(2014年8月29日アクセス可能).
- 2) ライフデザイン白書 (2013). 第一生命経済研究所. 14-19.
- 3) 宮木由貴子 (2014). 日本の男性の子育てを考える. ライフデザインレポート 2014.7: 1-6
- 4) 青野篤子 (2009). 「男性の子育て」支援の現状と課題 1. 福山大学こころの健康相談室紀要, 第3号.
- 5) 宮木由貴子 (2014). 父親の子育てに関する一考察～30代・40代の父親の子育て状況と母親の意識～. ライフデザインレポートスプリング 2014. 4: 28-35.
- 6) 山瀬範子 (2005). 父親の育児参加に関する一考察～父親の育児行為に関する意識を中心に～. 九州大学大学院教育学コース院生論文集. 5: 119-134.
- 7) 田村毅、倉持清美、岸田泰子、木村恭子、及川裕子 (2004). 出産・子育て経験が親の成長と夫婦関係に与える影響～男性の子育て参加～. 東京学芸大学紀要 6 部門. 56: 41-45.
- 8) 島崎志歩、田中奈緒子 (2007). 父親の生活実態と発達～就労・家庭状況、子育て関与との関連～. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要. 10: 109-117.
- 9) 高橋道子、高橋真美 (2009). 親になることによる発達とそれに関わる要因. 東京学芸大学紀要、総合教育科学系. 60: 209-218.
- 10) 田中恵子 (2010). 父親の育児家事行動・夫婦関係満足度の変化と母親の育児ストレスとの関連性. 人間文化研究科年報. 25: 215-224.
- 11) Xiao Ling Shi・桂田恵美子 (2006). 夫婦間コミュニケーションの視点からの育児不安の検討～乳幼児を持つ母親を対象とした実証的研究～. 母性衛生. 47 (1): 222-229.
- 12) 山村文 (2005). 幼児を持つ母親の生活満足度とソーシャルサポートの関連性について. 帝京大学心理学紀要, 9: 73-92.
- 13) 北脇雅美 (2012). 父親の育児参加に関する研究. 保育研究. 40: 37-42.
- 14) 加藤邦子、石井クンツ昌子、牧野カツコ、土谷みち子 (2002). 父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響: 社会的背景の異なる2つのコホート比較から. 発達心理学研究. 13 (1): 30-41.
- 15) 橋千恵、中村絵里子、中嶋夕美、石田貞代、萩原結花 (2008). 夫の育児家事行動の特徴と子どもへの愛着、夫婦関係満足度との関連～妻との比較～. 母性衛生. 49 (1): 65-73.
- 16) 田中美樹、布施芳史、高野政子 (2011). 「父親になった」という父性の自覚に関する研究. 母性衛生. 52 (1): 71-77.
- 17) 五十嵐久人、飯島純夫 (2001). 父親の育児参加への意識と育児行動. 山梨医大紀要. 18: 89-93.
- 18) 石井クンツ昌子 (2009). 父親の役割と子育て参加～規定要因、家族への影響～. 季刊家計経済研究. 81: 16-23.
- 19) 岩下好美 (2011). 家庭役割と職業役割の調和～父親の家事・育児参加～. Proceedings: 格差

(2014年8月29日アクセス可能)

- センシティブな人間発達科学の創成. 16 : 13-22.
- 20) 尾形和男、宮下一博 (2000). 父親と家族～夫婦関係に基づく妻の精神的ストレス、幼児の社会性の発達及び夫自身の成長発達. 千葉大教育学部研究紀要. 48 (1) : 1-14.
- 21) 菊池ふみ (2008). 父親の育児2～育児経験と父親の発達～. 文京学院大学紀要. 10 (1) : 99-120.
- 22) 多賀太 (2007). 仕事と子育てをめぐる父親の葛藤～生活史事例の分析から～. 国際ジェンダー学会誌. 5 : 35-61.
- 23) 岩田裕子、(1998). 父親役割への適応における父親のストレスとその関連. 日本看護科学会誌. 18 (3) : 21-36.
- 24) 清水嘉子 (2006). 父親の育児ストレスの実態に関する研究. 小児保健研究. 65 (1) : 26-34.
- 25) 冬木春子 (2005). 乳幼児を持つ父親の育児ストレスとその影響～父親と子どもの関係性に着目して～. 家族関係学. 24 : 21-33.
- 26) 岩下好美 (2010). 現代日本の父親とワーク・ライフ・バランスの実態. Proceedings : 格差センシティブな人間発達科学の創成. 12 : 1-10.
- 27) 及川裕子 (2005). 親性の獲得過程における変化とその影響要因の検討. 日本ウーマンズヘルス学会誌. 4 : 81-91.
- 28) 森下葉子、岩立恭子 (2009). 子どもの誕生による父親の発達的变化. 東京学芸大学紀要総合教育科学系. 60 : 9-18.
- 29) 西尾敏、中津郁子 (2012). 父となる発達過程における「自由の制限」と親役割意識. 小児保健研究. 71 (1) : 67-73.
- 30) 中島通子、牛之濱久代 (2004). 立ち合い分娩における夫の意識. 山口県立大学看護学部紀要. 8 : 41-47.
- 31) 荒川治子 (2006). 切迫早産の初産婦の夫の妊娠や出産、父親になることに対する気持ちの変化～入院から出産までの追跡～. 日本助産学会誌. 20 (2) : 64-73.
- 32) 常田美和、平塚志保 (2006). 早産児出生より1年間の父親としての経験～20代前半の男性へのインタビューから～. 看護総合科学研究会誌. 9 (3) : 65-74.
- 33) イクメンプロジェクト. <http://ikumen-project.jp/fusi/index.php>

Compromise and awareness related to become a father through the child care

YUMIKO MORINAGA*, MINEKO NANBA**, KAZUE NINOMIYA**

**Graduate Course of Health and Welfare studies, Okayama Prefectural University*

***Department of Nursing Science Faculty of Health and Welfare Okayama Prefectural University*

Abstract We examined how fathers involved in child care became like a father from their awareness and behavior as fathers.

Semi-structured interviews were conducted with 11 couples of parents who had a 3.5 year old infant supposed to receive a routine medical examination and completed a questionnaire when the infant was 3 and a half years old.

Fathers were asked when they actually felt they had become like fathers.

Analysis identified 9 subcategories related to changes of awareness and behavior as fathers: Difference in child care between father and mother; Dilemma between work and childcare; Image of a father doing housework and child care; Thoughtfulness to mother; Self-restraint; Responsibility to family; Relationship with the child; Feelings about reactions from the child; and Affection experienced by having a child.

The subcategories were classified into 4 categories: Inner conflict; Keeping psychic equilibrium; Playing a fatherly role; and Having a real sense of fatherhood, and the two central concepts: coming to compromise and awareness were identified.

And these two central concepts got the suggestion of being the cause that father came to seem to be father from the inside (consciousness) and an action of father.

Keywords : fatherhood, compromise, awareness, a period of child care